

日本旧石器学会 ニュースレター 第5号

NEWS LETTER No.5 JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

特別寄稿 宮崎県下における旧石器時代遺跡調査の近況

松本 茂 (宮崎県埋蔵文化財センター)

宮崎県下では最近十数年来、東九州自動車道（高速道）建設に伴う発掘調査が継続しておこなわれている。一連の調査は、複数の台地と河川を横切るように北上し、高密度の遺跡分布が確認されることになった（図1・写真1）。旧石器時代の遺跡も数多く存在し、資料は激増した感がある。一方、県道関連や圃場整備など高速道建設以外の開発に契機を持つ発掘調査においても重要な成果は多い。得られる知見はまさしく日進月歩である。

もたらされた成果には、大きくまとめると三つの側面がある。①従来から確認されていた石器群や遺構の量的増加、②これまで確認されていなかった新たな石器群の様相の質的増加、③石材環境を再検討する気運の高まり、の三つである。

①の側面は、従来の研究結果を追証・補強したり、あるいは更新する作用を果たしている。たとえば、一昔前には九州島全域を対象としても、数十例を数えるのみであった剥片尖頭器も、現在では単独の遺跡から数十点の資料が出土することも稀ではない。それどころか、製作過程を如実に示す、剥片尖頭器そのものを含む接合資料も確認されてきた（延岡市山田第1遺跡）。また、野岳・休場型細石刃核の分布が希薄と考えられてきた宮崎県域においても、近年では当該型式が普遍的に分布することが明らかになってきた（清武町下星野遺跡など）。また、陥し穴状遺構の検出例も増加が著しい（写真5）。

②の側面に関しては、後期旧石器時代全般を通して進展が著しい。たとえば、2000年の九州旧石器文化研究会では、AT下位出土の石器群がテーマとなったが、宮崎県域を対象とした集成的結果は、川南町後牟田遺跡をはじめとする20遺跡程度にとどまった。

ところが、それから数年のうちに資料は倍増し、豊富な層位的



図1 宮崎県域の旧石器時代遺跡分布

アカホヤ(K-Ah)	
MB0	
ML1	第8・9・10段階石器群
小林軽石(Kr-Kb)	
MB1	第6・7段階石器群
ML2	第5段階石器群
ML2	第4段階石器群
始良Tn(AT)	
MB2	第3段階石器群
始良深港(A-Fm)	
始良大塚(A-Ot)	
MB3	第1段階石器群
ML3	
アワオコシ(Kr-Aw)	
ML4	
イワオコシ(Kr-Iw)	
...	
始良岩戸(A-Iw)	
阿蘇4(Aso-4)	

図2 宮崎平野の基本層序と石器群

知見も加わった。A T 上位石器群も後述のように、既知の石器群とは顔付きの異なる様相が多く確認されている。③の側面に関しては、列島他地域と同じく石材鑑定に関わる問題がある。別府大学による船野遺跡の調査以来、宮崎平野における旧石器時代の使用石材は流紋岩が大きなウェイトを占めると考えられてきた。だが、近年の再検討の結果、従来、流紋岩とされてきた石材には、真正の流紋岩以外にも頁岩やホルンフェルスなど多様な岩石種が含まれることが明らかになっている。たとえば、旧石器時代の石器にしばしば用いられる緑色珪質岩も最近、藤木聡氏の調査によって産状が次第に解明されつつある。ちなみにこの石材は国富町と宮崎市にまたがる塚原遺跡の縄文時代草創期の石斧製作にも多用されていた。また、宮崎・鹿児島・熊本の三県境にある桑ノ木津留・上青木産黒曜石の分布範囲も県北地域に広がることが確認されつつある。また、逆に県北五ヶ瀬川流域に産する白色に風化する流紋岩製の石器が宮崎平野中央部以南で確認される度合いも高まってきた。このような諸々の成果と派生する課題を整理するためにも、考古学的層位の共通理解をはかることが要請されていた。そこで宮崎県埋蔵文化財センターでは、東九州自動車道（都農～西都間）関連の発掘調査成果を中心に、旧石器時代包含層の重層遺跡を材料にした層位呼称の統一をはかった。図2に示すのがそれで、MLはローム層、MBは黒色（暗色）帯を意味している。こうした動向を受けて、宮崎県旧石器文化談話会でも2005年に宮崎10段階編年と略称する編年案を提出した。これはA T 下位黒色帯以下の第1段階から縄紋草創期の細石刃石器群に相当する第10段階に至る細別案であり、A T 下位を三つ、A T 上位のナイフ形石器石器群四つ、細石刃石器群を三つに分ける。縄文早期包含層と接し、しばしば混在する細石刃石器群以外は概ね出土層位に準じた順序で設定している。以下、いくつかの話題に触れたい。

第1段階石器群はA T 下位黒色帯の最下部(MB



写真1 新田原台地を北から望む（東畦原第1遺跡）



写真2 高野原遺跡第5地点第Ⅲ文化層の石器ブロック



写真3 高野原遺跡第Ⅲ文化層の石器
上段：ナイフ形石器・台形様石器、下段：搔器

3) からその下部の褐色ローム (ML 3) にかけての層準から出土する。宮崎平野部における当該段階石器群の様相は、最近数年の東九州自動車道関連の調査によって明らかとなった部分が多い。以前は、いわゆる台形様石器や局部磨製石斧といった後期旧石器時代前半期のメルクマールとなる器種の存在が、旧北方町矢野原遺跡や川南町後牟田遺跡など少数の事例を除き希薄であったため、地域的な器種組成と捉える考えもあった。だが、遺跡数が増加するにつれ、これらの器種の確認事例もいくつか数えられるようになった。局部磨製石斧および打製石斧は延岡市山田第1遺跡、都農町朝倉遺跡、川南町中ノ迫第3遺跡、高鍋町野首第1遺跡、新富町音明寺第2遺跡などで確認されている。台形様石器も高鍋町野首第2遺跡、新富町西畦原第1遺跡などで確認されているほか、旧高岡町高野原遺跡第5地点において注目すべき成果が挙がっている。

高野原遺跡第5地点では、A T下位に三つの文化層があり、A T直下黒色帯最上部に検出される礫群に対応するのが第Ⅲ文化層である (写真3)。宮崎 10 段階編年では第3段階に該当する当該文化層では石刃製で小形のナイフ形石器や石刃・剥片製の搔器を中心とした組成に、台形様石器2点が加わっている。下層にあたる第Ⅱ文化層からも台形様石器1点を確認しており、いずれにせよ黒色帯上半部の石器群の安定した構成要素であった可能性が高い。宮崎平野部の他遺跡の類例 (野首第2遺跡他) もあり、今後の事例増加が期待できる。高野原遺跡第5地点における見逃せない層位的知見として、ローカルテフラである始良深港と始良大塚火山灰層間の間層の存在がある。宮崎平野部では両火山灰層が混在して検出されるのが常態であるが、ここでは両者が1枚の黒色帯によって分離されている。この間層を中心に第Ⅱ文化層が展開し、更に下層の始良大塚を挟んで第Ⅰ文化層が設定されている。これが局地的な堆積であるのか、石器群と対応させて考えてよいのかは、今後おおいに議論の余地があるが、興味深い事例である。高野原遺跡第5地点第Ⅰ文化層も含め、宮崎 10 段階編年第1段階以前、いわゆる最古段階の石器群の様相に関しては、いまだ後牟田遺跡の成果を相対化できるまでの蓄積に乏しい。さしあたり、さきに挙げた局部磨製石斧を含む石器群や礫器を含む石器群の成立過程の考究が望まれる。

A T上位でも特筆すべき成果が多くある。まず、以前に橘昌信氏によって指摘されていたA T直上の石器群 (片田段階=宮崎 10 段階編年第4段階) の追証事例が増えた点である (新富町春日地区遺跡第2地点など)。これは文字通りの出土層位と二側縁加工のナイフ形石器と搔器といった組成から特徴付けられる。こうした特徴から一見A T直下の第3段階との連続性が窺えるが、今後技術的に詳細な検討も要する。



写真4 北牛牧第5遺跡第Ⅱ文化層出土の今峠型・北牛牧型ナイフ形石器



写真5 東畦原第1遺跡の陥し穴状遺構

第5・6段階にも課題は多い。第5段階には剥片尖頭器や大形の角錐状石器の盛行、第6段階は今峠型ナイフ形石器の盛行や台形石器の増加などの現象が想定されているが、層位的には検証が足りない部分も多い。なにより、石器群の顔付きが遺跡ごと、ブロックごとに多様である。一例として北牛牧型ナイフ形石器を挙げたい（写真4）。当該型式は秋成雅博氏によって仮称されたものだが、素材剥片や調整加工の在り方などに今峠型ナイフ形石器との共通点が多い。だが、いわゆる典型的な今峠型のみで構成される石器群もあれば、北牛牧遺跡第5地点のごとく、北牛牧型が優勢を示す場合もある。こうした現象の成因はいまだ不分明である。隣県鹿児島では宮田栄二氏が宮崎平野を上回る層位的知見を駆使して、A T上位の石器群の編年再編にも着手されている。鹿児島に限らず、九州島他地域、列島他地域と比肩しうる共通性ととも、宮崎地域の地域性、あるいはより細かに流域や台地ごとの地域性の解明という双方向の研究姿勢が必要とされる現況である。諸賢のご意見・ご教示をお願いしたい。

A Brief Introduction of the Korean Palaeolithic Society

Hyeong Woo Lee
(Chonbuk National University)

The Korean Palaeolithic Society is an academic organization dedicated to promote Palaeolithic studies around Korea. The Korean Palaeolithic study has a history of more than 40 years starting with the excavations of Seochangri and Chonkokri. The importance of these findings have encouraged the necessity of Palaeolithic archaeology as a specialized domain. In consequence, numerous Palaeolithic scholars have been generated. In the course of developing, not only the increasing of Palaeolithic find-spots but also various theoretical and practical studies have enabled to continue. In present, many important academic issues have been generated and debated. With increasing such Palaeolithic contributions, high expectation for the academic works has been emerged.

Although there are many archaeological organizations in Korea, they cannot give a complete guarantee for fostering correspondence in professional Palaeolithic academism. For

the purpose of achievements on these matters and concomitant various demands, the Korean Palaeolithic Society was started in the year 1999. Prof. Y. H. Chung (YOUNG NAM University) was appointed as the first chairman for the Society. Executive board for the Society was also launched in full support of members consisted of individual and institutional bodies. Under the regulation, the chairman and the board change every two years; this year (2005) is the fourth term. The current chairman is Prof. Y. C. Park (YONSEI University).

The Korean Palaeolithic society is interested in a wide range of research areas: lithic studies, field methods, quaternary geology, dating, human evolution, fossil studies and so forth. The Society deeply appreciates the value of the research infrastructures and pays attention to strengthen support and try to increase mutual understanding. The Journal of the Korean Palaeolithic Society was founded in the year 2000. The Journal is published twice a year. It is the main journal for Palaeolithic archaeological issues and the Journal also provides general information related to Palaeolithic news, academic conference information and brief reviews of new books.

The society holds an annual official academic conference, which was also started in the year 2000. It offers a fruitful opportunity to receive up-to-date excavation results and current issues of studies. In addition, the high standard research design can be processed and educational purpose is also satisfied throughout the conference. The conference paper is also published and distributed during the conference event.

From the year 2005, online access is also available. The internet service was initiated and gives a chance to see the journal's articles including the full conference text as well. Current field reports are available as well. The site address is www.kolithic.or.kr.

The Korean Palaeolithic Society is generally open to everyone, which means every person who is interested in Korean Palaeolithic is literally welcome. Membership can be issued as a student, a general scholar or an institute. The participants from other countries are still few in number because all the written text is in Korean, but it does not mean membership is restricted to only Koreans. The Society is attempting to globalise and various means of efforts will be delivered in very near future.

韓国旧石器学会の概要

イヒョンウ (国立全北大学校)

金 正培 訳 (東京大学大学院)

韓国旧石器学会は学術的な組織であり、韓国周辺の旧石器時代研究を促進することに専念している。韓国の旧石器時代研究は石壯里遺跡と全谷里遺跡の発掘に始まり、40年以上の歴史をもっている。これらの発見の重要性は、専門的な分野とし

ての旧石器時代考古学の必要性を促したことにあ
る。その結果として、多くの旧石器時代研究者が
生み出された。旧石器時代研究が進展する過程で、
旧石器時代遺跡の発見が増加しただけでなく、論
理的かつ実質的な多様な研究を継続することが可
能となった。これにより、現在、多くの重要な学
術的な課題が生み出され、議論されている。そう
した状況を受けて、旧石器時代に関する論文の寄
稿が増加し、学術的な成果に対して高い期待が寄
せられている。

韓国には多くの考古学的な組織があるにもかか
わらず、専門的な旧石器考古学における情報共有
を促進するための完全な保障を与えることができ
ない。こうした問題およびそれに付随する多様な
要請を解決するために、韓国旧石器学会が1999
年に発足した。鄭永和教授(嶺南大学校)を初代
会長として選任した。また、個人資格および団体
資格からなる会員の全面的な支援の下で、旧石器
学会理事会も発足した。会の規則により会長と役
員の任期はそれぞれ2年で、今年(2005)は第4
期目になる。現在の会長は、朴英哲教授(延世大
学校)である。

韓国旧石器学会は、石器研究、発掘方法論、第
四紀地質学、年代決定、人類進化、化石研究など
の幅広い分野に関心を寄せている。韓国旧石器学
会では調査基盤の向上と支援の強化に注意を払うと
ともに、相互理解の向上に努めている。韓国旧石
器学会誌は2000年に刊行され始めたもので、年
に2回発行されている。それは旧石器考古学の話
題を扱うための主要雑誌で、旧石器時代のニュー
ス、学術大会の情報や簡単な新刊紹介といった一
般的な情報を提供している。

韓国旧石器学会は2000年から年1回の公式的
な学術大会を開催している。そこでは、最新の発
掘成果や現在の研究課題を入手する有益な機会が
提供されている。加えて、この学術大会を通じて、
高い水準の発掘調査企画を検討することができ、
教育的な目的も満たされる。また、大会期間中に、

学術大会の発表集が出版され、配布される。

2005年からはオンラインアクセスも可能となる。インターネットのサービスも始まり、学術大会発表集全文を含む学会誌掲載論文を閲覧する機会が提供された。最近の発掘調査報告書の閲覧も可能である。サイトのアドレスはwww.kolithic.co.kr.である。

韓国旧石器学会は万人に広く解放されている。すなわち、韓国の旧石器時代に興味を持っている

人なら誰でも歓迎するということを意味する。会員は、学生、一般研究者、あるいは団体として登録することができる。全ての文章が韓国語で書かれているという理由から、国外の参加者はまだ数少ない。しかし、それは会員を韓国人だけに限定していることを意味しない。韓国旧石器学会は世界標準化を目指しており、様々な方法による努力の結果をごく近い未来にお目にかけることができるだろう。

役員選挙結果のお知らせ

先の2005年12月1日～22日に郵送で行われた、次期日本旧石器学会役員選挙の投票に関し、開票作業を12月25日に行いました。集計の結果についてご報告します。選挙管理委員長については、日本旧石器学会役員・会計監査委員・顧問選挙規定により、総務委員会委員西井幸雄氏に委嘱しました。

なお、今回の選挙当選者は本年6月に開催予定の次回総会で承認を受けた後、次期役員となる予定です。

1. 場所：調布市たづくり会館 303 会議室
2. 日時：2005年12月25日
3. 開票作業：西井幸雄（選挙管理委員長）、
織笠明子・亀田直美（以上、
選挙管理委員）、白石浩之・
比田井民子・砂田佳弘・伊藤
健（以上、総務・会計委員）

4. 投票数

- 1) 投票通 94 票
- 2) 有効投票通 92 票
- 3) 投票数 907 票

5. 当選者

各地域で最も投票数の多い人（○印）と、上位15名が当選者

氏名	投票数	地域	順位
安蒜政雄	44	関東	3
伊藤 健	27	関東	9
稲田孝司	76	中四国	○
大竹憲昭	39	中部	5
小野 昭	65	関東	○
小畑弘己	41	九州	○
木崎康弘	22	九州	11
木村英明	49	北海道	○
佐川正敏	40	東北	○
佐藤宏之	53	関東	2
佐藤良二	21	近畿	12
渋谷孝雄	32	東北	7
白石浩之	82	中部	○
砂田佳弘	28	関東	8
諏訪間順	41	関東	4
堤 隆	66	中部	1
長沼 孝	18	北海道	14
萩原博文	19	九州	13
比田井民子	25	関東	10
藤田 尚	12	中部	15
藤野次史	34	中四国	6
松藤和人	46	近畿	○

以上の当選者のほかに、得票数が1票あるいは2票の方が21名おられました。その合計は27票です。

キム・アッカーマン氏を迎えた考古学 コロキウム開催される

昨年、10月29・30日の両日、オーストラリアの考古学者キム・アッカーマン氏を迎えた考古学コロキウムが、首都大学東京において開催された。主催は、首都大学東京考古学研究室および国立科学博物館人類研究部で、日本旧石器学会がこれを後援した。実施に当たっては、首都大学東京の小野昭さん、国立科学博物館海部陽介さんをご尽力された。当日は、当学会からも多くの参加者があった。

アッカーマン氏は、1967年以降、西オーストラリアを中心にアボリジニの物質文化の研究に従事、世界各地の石器製作にも精通する。オーストラリア国立博物館など、3つの博物館のキュレーターを歴任。現在、アボリジニの芸術、物質文化、道具技術についての研究を行う一方、アボリジニの遺骨や重要文化遺物の返還問題においてもコンサルタントとして活躍する。2004年にリニューアルした国立科学博物館の新常設展に、氏の優れた技術で製作した石器を展示提供した縁で、今回同博物館の招聘により来日した。

初日は「西オーストラリアにおけるアボリジニの暮らし」および「キンバリー地域のアボリジニの物質文化—その地域変異と素材の

多様性—」と題し、アッカーマン氏が二つの講演をおこなった。アボリジニの物質文化を見るかぎり、通常の考古遺跡には残らないもののがかなりあることが実感され、我々の遺跡・遺物の解釈のなかで、かなり注意をはらわなければならないことが再認識させられた。また、日本側からは同大学の工藤雄一郎氏による「磨製石斧を使用した木材伐採実験—樹種による伐採効率の差異の検討—」の発表が行われた。

翌日は、同大学の実験ヤードで、フリントや黒曜石を使ったアッカーマン氏の石器製作ワークショップが開催された。

氏はいくつかの石器製作実験をおこなったが、フォルサム型尖頭器製作の槌状剥離実演には、卓抜した技術を披露された。また、氏の行った石器の装着法には、学ぶべき点が多かった。カンガルーの尾の腱を唾液で湿らせ鏃を矢に緊縛する方法、加熱し練った樹脂を使ったスクレブラの固定方法など、旧石器の装着法について再考させられるものであった。また、カンガルーの腱による固定の強靭さは予想以上であった。

その後は、氏の指導により参加者それぞれが、石器製作にチャレンジした。日本の実験石器製作のエキスパート国士舘大学の大沼克彦氏も来られ、夢の競演もみられた。有意義なコロキウムであった。

(研究企画委員会 堤 隆)



写真1 フォルサム型尖頭器の槌状剥離実演



写真2 フォルサム型尖頭器原形の槌状剥離

お知らせ

第3回日本旧石器学会総会、研究発表、シンポジウムは、下記の日程で、2006年6月17(土)・18(日)に、さいたま市埼玉県立博物館において開催いたします。なお、会場は、JR大宮駅から東武野田線を利用して、大宮公園駅下車、徒歩5分です。

6月17日(土) 12時20分～16時30分
総会(12時20分～13時20分)

講演(13時30分～14時30分)

アフリカ狩猟採集民の狩猟

市川光雄(京都大学)

一般研究発表(14時30分～16時30分)

1. 旧石器時代遺跡のジオアーケオロジー-明治大学
調布付属校用地の遺跡(仮称)の調査(2)

明治大学校地内遺跡調査団

安蒜政雄・野口 淳・林 和広

2. 神子柴遺跡の石器石材利用について

中村由克・望月明彦・堤 隆

3. 黒曜石分析の従来方法の問題点

国武貞克・大屋道則・田村 隆・島立桂・

横山一巳・望月明彦・平尾良光

4. 西南ドイツにおける後期旧石器時代初頭研究の
現状

山岡拓也

5. 狩猟用具の機能の検証-復元弓を用いた実験研究
石井 良

ポスターセッション(数本を予定)

懇親会(17時30分～)

6月18日(日) 9時～15時30分

シンポジウム 旧石器時代の狩猟を考える

1. 後期更新世の日本の中・大型動物相について
高橋啓一

コメント: 出穂雅実

2. 野尻湖における狩猟活動 小野 昭

コメント: 佐藤宏之

3. 陥し穴猟を考える 今村啓爾

コメント: 笹原芳郎

4. 南九州の落とし穴猟 宮田栄二

コメント: 松本茂

5. ナイフ形石器の機能 御堂島 正

コメント: 山田しょう

6. 狩猟用刺突具の変遷 須藤隆司

コメント: 藤野次史

7. 狩猟活動の民族誌 田口洋美

(昼食休憩)

8. 討 論(13時30分～15時30分)

※発表タイトル等は若干変更となる場合があります。

申し込みは別添のハガキにご記入の上、5月19日(月)までに、事務局までお申し込み下さい。また、やむを得ず欠席する場合は、会則第5条により、欠席会員の委任状を含め、全会員の5分の1以上の出席をもって総会が成立しますので、同ハガキ下段に記載された委任状に記入、捺印のうえ投函願います。

会費納入のお願い

2006年度会費の納入をお願い致します。また、2005年度以前の会費を納めていない方は、速やかに納入して下さい。会費納入は同封の郵便振替用紙にてお願い致します。年会費5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。

住所変更のお願い

転居をされた方は必ず住所変更の手続きをお願い致します。事務局までメール等でご連絡ください。

日本旧石器学会ニュースレター

第5号

2006年3月31日発行

編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会

安蒜政雄・谷和隆・藤野次史

発行: 日本旧石器学会

事務局: 愛知学院大学文学部白石研究室

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

電話 05617-3-1111～8(内線3247)

E-mail hshira@dpc.aichi-gakuin.ac.jp